文が正しければ、女性が自身の感情を表出する要素をも含めて「たいだいし」と用いた例になるであろうが、異文のあるところであるからなお後考に俟ちたい。しかし要は、絶対女性の使用しない用語だとすることもあるまい。『源氏物語ハンドブック』に、「中古の宮廷を中心とする男子の口頭語として発達したらしい。人を非難叱責する語なので、地の文よりは会話語に使われやすく、女性よりは男子が用いやすいという傾向を生じたのであろう」といわれる通りであろう。

（本学教授）

八代集夏部における時鳥の歌について

小島道子
土田益美

八代集夏部において、各集を通じ入集歌数の最も多いのは時鳥の歌である。こゝでは時鳥に関して見られる一、二の問題をとりあげ、夏における時鳥に対する時代の好尚の一端を探るとともに、その歴史的変移のあとをもたどってみたい。

最初に各勅撰集における時鳥の歌の状況、並びにその夏部総歌数に対する比率を掲げると、次の如くである。

集名	勅撰	夏部総歌数	時鳥歌総数	比率
古今	34	27（137～164〔139〕）	(1)（135）	79%
後撰	70	29	27（95～107、111～126〔114 122〕）	41%
拾遺	58	70	27	47%
後拾	70	27（166、178～203）	(1)（165）	39%
金葉	66	25（111～135）		38%
詞花	31	8（53～60）		26%
千載	90	26（148～167、188～193）	(1)（170）	29%
新古	110	33（189～220、248）	(4)（235～237、244）	30%

注1 時鳥歌総数は、各集において「時鳥」の題の下に群をなして配列されている歌（以下時鳥歌群と称する）の中で、「時鳥」という語のよみこまれている歌の総数を示すものであり、（ ）内は国歌大観の番

号により、その群の最初と最後の歌を示す。なお、（　）内に更に〔　〕で示したものは、その番号の歌に「時鳥」という語のよみこまれていない歌であることを示す。

2.（）で示した数字は、時鳥歌群以外の歌において、主題は他のものであるが、時鳥が従の立場でよみこまれている歌の数を示し、その下に（　）で示したものは、その歌の番号である。

3.場合によっては、時鳥歌群とその前後の歌群との境をなす歌において、両方何れにも属せしめうる性格のものもあるが、この場合は一応時鳥歌群に属させて考えた。

4.後撰集の場合、他の集の如く明白に群を形成することなく、夏部全般にわたって配列されているという特異な性格が見られるので、一応「時鳥」がよみこまれている歌全部を対象とした。

5.拾遺集の場合、111～126群においては、その中の113 114の二首は或は「淀」に関連のある歌群として考えることも可能であるが、他の集に見られぬところでもあり、また121 122の二首も「夏夜」歌群として考えることも可能であるが、一応時鳥歌群として考えた。

6.右の分類については、なお異論も多いかと考えられるが、いろいろ御教示を得て改めたいと考える。

これにより見られるように、時鳥の歌は、古今集では夏部の大部分を占めているが、後撰集においてはその比率は半減し、拾遺集では稍々増加を見せるものの、以後新古今集に至るまで、その割合は減少してゆく傾向が見られるのである。この理由については、

(1)季題の細分化

(2)時鳥の歌自体における素材の細分、独立

が考えられるものである。即ち(1)に関しては、風巻景次郎博士の調査（「八代集四季部の題に於ける一事実」（『新古今時代』所収）に詳しく、たとえば、古今集に見られた季題7は、以後甚しく細分化され、後拾遺集・千載集の如きは、17・21という数字を示しているのである。このことは古今集に対する各集の夏部の総歌数の比率を考慮に入れても、なお時鳥の歌の夏部総歌数に対する比率の減少を誘引する所のものであることを示している。また(2)に関しては、詳細は後述する如くであるが、時代の下降と共にこの傾向が強まってゆくのが見られるのである。かくて時代と共に、数の上、比率の上においては、時鳥の歌に対する時代の好尚の念は他の歌題の進出とと

もに相対的に減じてゆくように見られるのであるが、なお各集夏部の第二位入集歌数（古今〔藤・遅桜・蓮・夏月・床夏・夏暮各1〕　後撰〔撫子7〕　拾遺〔卯花7〕　後拾〔卯花7〕　金葉〔卯花・あやめ各8〕　詞花〔五月雨4〕　千載〔五月雨12〕　新古〔五月雨11〕）と考えあわせる時、なお夏の歌においては不動の地位を占めるものであったことが知られるのである。

右の如く、時鳥の歌は八代集を通じ、夏部における最も重い地位を占めるものとなっているのであるが、次には、これが詠歌の対象とされた場合、どのような点に注目され、それが時代によりどのような変移が見られるかに関し、以下

1.聴覚に訴える時鳥

2.時鳥と他の素材――橘・五月雨・月

の二点をとりあげ考察を試みてみたい。

1.聴覚に訴える時鳥

これについては、

A　待つ時点で詠まれた歌

B　初音に関し詠まれた歌

C　その他鳴いている時鳥につき詠まれた歌

と大別することができるのであるが、何れにせよ、春の鶯と同じく、聴覚に訴えるものとして、殆んどの歌に「鳴く」「名乗りす」「語る」「物語る」「初音」「声」「聞く」と聴覚関係の語が詠まれ、そうした語のない場合においても「待つ」の語により、鳴く音に対する希求の情が示される場合が多いのである。右に該当しない歌としては、

古今　152　やよや待て山時鳥言づてむわれ世の中に住みわびぬとよ

後撰　159　木がくれてさ月まつとも時鳥羽ならはしに枝移りせよ

211 166　五月雨に春の宮人来る時は時鳥をや鶯にせむ

花も散り時鳥さへいぬるまで君にもゆかずなりにけるかな

後拾　178　わが宿の垣根な過ぎそ時鳥何れの里も同じうの花

新古　213 201　昔思ふ草の庵の夜の雨に涙なそへそ山時鳥

過ぎにけり信太の杜の時鳥たえぬしづくを袖に残して

の七首が見られるのみであるが、新古今の二首は背後に時鳥の鳴く音がある事は明らかであり、古今152・後撰159

後拾178 もなお背後にその鳴く音を考えることも可能かと考えられ、このように見る時は、八代集中、聴覚に訴えることのない時鳥の歌は僅かに後撰に見られる二首のみということになり、如何にその鳴く音が詠歌の対象としてもてはやされたかが知られるのである。

A　待つ時点で詠まれた歌

待つ時点で詠まれた歌としては、

a　夏になって初音を今か今かと待つ（他の人は聞いても自分はまだ聞かない場合も含む）

b　初音は既に聞いたが、夏の期間中一日を単位として、いわばその一日の中における初音を今かと待つ

の二つの性格が見られ、各集次の如くである。

（勅撰集名）	（時鳥総歌数）	（待つ時点で詠まれた歌数）
古今	27	3（a 137 138、b 161）・(1)（a 135）
後撰	29	2（a 159 164）・(2)（a 149 150）
拾遺	27	7（a 95 96 97 98、b 118 121 126）
後拾	27	10（a 166 178 180 181 182 185、b 186 191 193 194）・(2)（a 165 183）
金葉	25	10（a 112 114、b 117 119 121 122 124 125 127 134）
詞花	8	4（a 53 54 55 56）
千載	26	5（a 148 151、b 166）
新古	33	7（a 189 191、b 204 209 212 214 217）

注1.（　）内の数字は歌の番号、（）内の数字は時鳥歌群以外の歌群に属する歌の場合、及び時鳥歌群中にあっても恋歌・贈答歌として時鳥に托された抒情歌である場合の歌の数を示す。

2.（　）内のaは夏季を通じての初音を待つ場合の歌、bは一日における初めての音を待つ場合の歌と考えられるものの分類を示す。判別困難な歌も多いが、配列の上から判断を下した。

右において気付かれることは、後拾遺・金葉・詞花三集において、待つ時点で詠まれた歌が多いことである。詞花集がaの性格の歌のみで構成されているのも注目され、千載・新古今集になると著しい減少が見られるのであり、後拾遺・金葉・詞花の時代にいかに初音が待ち焦がれられたかを知ることができるのである。

また、待つ態度について見る時、そこにも時代により変化してゆく跡が認められるのである。すなわちその態

度としては、

1.心の中で待ち焦がれる段階

2.何らかの行動にそれをあらわす段階

イ寝ずに待つ・目を覚まして待つ場合

ロ積極的に他所へたずねてゆく場合

とに分けて考えることができ、各集について見ると次の如くである。

	古今	後撰	拾遺	後拾	金葉	詞花	千載	新古
1	3	(1)2	(2)4	4	(2)2	4	1	4
2イ	0	0	0	3	4	3	0	2
1								
ロ	0	0	0	2	5	0	0	2

注、（）内の数字は前表注1に示したものと同じ。

これによれば、古今・後撰集の場合には、

古今157　五月待つ山時鳥うちはぶき今もなかなむ去年の古声

後撰159　木がくれて五月待つとも時鳥羽ならはしに枝うつりせよ

の如く、ただ心の中でのみ待ち焦がれる歌が採られているのが、やがて拾遺集ともなれば、

拾遺118　五月雨はいこそねられね時鳥夜ぶかくなかむ声を待つとて

126　時鳥待つにつけてや照射する人も山辺に夜を明かすらむ

の如く、寝ないで待つ歌が収録され、更に後拾遺・金葉集においては一層積極的となり、

後拾180　時鳥たづぬばかりの名のみして聞かずばさてや宿に帰らむ

185　聞き捨てて君が来にけむ時鳥尋ねにわれは山路越えみむ

金葉112　今日もまたたづねくらしつ時鳥いかで聞くべき初音なるらむ

122　稲荷山尋ねやみまし時鳥まつにしるしのなきと思へば

の如く、家の中に閉じこもって待つのでなく、他所へ尋ねてゆくという歌が姿を現わし、金葉集においては全歌数の半分が2ロの性格のものとなり、詞花集はその点性格を異にするとはいえ、こゝでも後拾遺・金葉両集はその特異性を主張しているといえるのである。後拾遺集夏部の巻頭歌、

165　桜色に染めし衣をぬぎかへて山時鳥今日より

ぞ待つ

の如く、更衣と共に早くも待たれた時鳥は、夜も寝ることなく待たれ、また夜ぶかく眼覚めて待たれ、初音を聞いた後もなお夜毎にそのおとずれが待たれ、果ては他所にまで尋ねてゆくまでの執心となり、やがては信太の杜・音羽の山・神南備山・老曽の森・いるさの山・くらはし山・たかまの山等時鳥に関しての歌枕の出現ともなったものであった。

B　初音に関して詠まれた歌

時鳥の初音は、都の人にとり、先にも見たとおり、後拾遺集夏部の巻頭歌の如く、夏に入り更衣と同時に早くも待ち焦がれられたものであってみれば、山から里へ、里から都へ移るその初音が、如何に待ちわびられたものであったかは想像に難くない。そして、

拾遺 98　山里にしる人もがな時鳥なきぬと聞かば告げに来るがに

詞花 53　昔にもあらぬわが身に時鳥待つ心こそ変らざりけれ

の如く、山での初音の便りをいち早く聞こうと思い、身は年老いても、心は若き日にかわることなく初音が待ち焦がれられるものであった。そしてまた時鳥のまだ里なれず鳴き馴れない忍びの初音は、

拾遺 96　初声の聞かまほしさに時鳥夜ぶかくも目を覚ましつるかな

の如く、夜ぶかく目を覚ましても待たれたものであり、その結果初音を耳にした人は、

古今 143　時鳥初声聞けばあぢきなくぬし定まらぬ恋せらるはた

拾遺 103　山がつと人はいへども時鳥まづ初声は我のみぞ聞く

後拾 196　聞きつるや初音なるらし時鳥老は寝覚ぞ嬉しかりける

の如く、或は主定まらぬ恋心にさそわれ、或は身分・年齢等それぞれの状態に応じての限りない喜悦の情を抱かせられ、感慨にふけらされたものであった。そしてこの初音（前項Aのaに於て対象とした文字通り夏における最初の音をさしていう）を耳にして詠まれた歌、また関連して詠まれた歌の作者につき、略々時代別にして示すと次の如くである。（読人不知の歌については時代を定かに知ることができない歌が多いので、「不知」として示し、作者の判明する歌については万葉集の作者は「万

」、勅撰集時代に入っての作者はそれぞれ初出の勅撰集の略号により之を示した。たとえば「金」は金葉集初出歌人であって、ほゞ金葉集の頃を中心として活躍する歌人の歌であることを示す。但し後撰集の撰者の場合の如く、拾遺集において初めて登場する場合もあるのであるが、一応初出勅撰集によって大体の時代を示した。但し万葉集歌人で拾遺集初出といったような場合は「万」として扱った。以下同じ。）

（勅撰集名）（歌数並びに歌人内訳）

古今　4（不知 140 141、古 142 143）

後撰　(2)（不知 150、古 189）

拾遺　6（不知 99、古 103、後 104、拾 100 101 102）

後拾　1（後拾 196）

金葉　4（後拾 111 115 126、金 120）

詞花　0

千載　3（千 150 154 157）

新古　6（万 190 195、拾 196、後拾 192 198、金 199）

注　歌の配列の上から考える時、なお初音に関するものと解し得る歌もあるが、ここでは明らかに初音の由が詠みこまれた歌、またそれと考えられる歌を対象とした。

これによれば、初音を耳にしての喜びをはじめとし、初音を耳にし得たことをめぐっての歌は、読人不知や後拾遺集初出歌人の時代にまでに好んで詠まれたことが知られ、千載集において三首すべてが千載集初出の歌人により詠まれていることを除いては、初音に対する関心は八代集の前半期を中心に特に強く見られるということができよう。

C　鳴いている時鳥につき詠まれた歌

イ一声を問題とした歌、連続して鳴く場合・鳴きしきる場合・声をふりたてて鳴く場合を問題とした歌

これは前述の初音とも関係があり、重なる部分もあるのであるが、まず各集に見られる一声（関連して二声も）が対象として詠まれている歌につき見ると、次の如くである。

（勅撰集名）（歌数並びに歌人内訳）

古今　1（古 156）

後撰　3（不知 191 197、古 172）

拾遺　2（古 105、後 106）

後拾　7（拾197、後拾188 190 191 192 195 200）
金葉　1（金131）
詞花　1（後拾57）
千載　5（金149、詞155 159、千164 166）
新古　8（万195、後189、後拾197 203 205、千206、新古207 208）

これによれば、拾遺集以前においては「一声（二声）」が詠歌の対象となったのは少なく、後拾遺集以後関心が持たれた傾向が見られ、

後拾195　東路の思ひ出にせむ時鳥老曽の杜の夜半の一声
金葉131　時鳥一声なきて明けぬればあやなく夜の恨めしきかな
詞花57　山彦のこたふる山の時鳥一声なけば二声ぞ聞く
千載164　時鳥聞きもわかれぬ一声に四方の空をもながめつるかな
新古208　一声は思ひぞあへぬ時鳥たそがれ時の雲の迷ひに

等によって、時鳥の「一声」に対する当時の人々の関心の程が知られるのである。そしてその「一声」なく時鳥に対し、連続して鳴く時鳥・鳴きしきる時鳥・声ふりたてて鳴く時鳥を対象とした歌が見られ、次の如くである。

勅撰集名	（歌数並に内訳）
古今	7（不知148 150 151、古157 158 160 164）
後撰	7（不知148 156 163 175 176 184、後196）
拾遺	8（万120、不知117 123、古116、後101 111、拾100 124）
後拾	0
金葉	1（金132）
詞花	1（後拾58）
千載	1（金193）
新古	2（不知194、拾196）

これによれば、拾遺集以前にその性格の歌が多く、

古今148　思ひ出づる常盤の山の時鳥唐紅のふり出でてぞなく
160　五月雨の空もとどろに時鳥何を憂しとか夜ただ鳴くらむ
後撰163　此頃は五月雨近み時鳥思ひ乱れてなかぬ日ぞなき
184　あしひきの山時鳥うちはへて誰か勝ると音をのみぞなく
拾遺111　あしひきの山時鳥今日とてや菖蒲の草のねにたててなく
117　なけやなけ高間の山の時鳥この五月雨に声な惜しみそ

等の如きが見られるのである。先に見た「一声」が主たる対象となったのが後拾遺集以後であったことと思い合わせる時、連続して鳴く時鳥・なきしきる時鳥・声ふりたてて鳴く時鳥を愛でる三代集の傾向は、後拾遺集を境としてその「一声」に注意をむける傾向へと移ってゆき、「一声」ゆえに起き明かし、寝覚めることの多い歌へと、好尚の変移が見られるのである。

ロ　時鳥のなく時刻

次には時鳥のなく時刻について考えてみたいが、いうまでもなく、時鳥は夜なくものとして把握されているのであり、枕草子においても「五月雨のみじかき夜に寝覚をして、いかで人よりさきにきかむとまたれて、夜ふかくうちいでたるこゑの、らうらうじう愛敬づきたる、いみじう心あくがれ、せんかたなし。」（日本古典文学大系本四一段）と書いている。そしてこの「夜」について、今少しく細かに分けてみる時、次の如き状態が見られるのである。

	夕	宵	夜ふけて	夜深く	明	方	（今朝）	夜
古今	0	0	0	1	1	2	3	3
後撰	0	0	1	1	3	1	3	3
拾遺	0	0	2	4	1	1	7	7
後拾	0	1	2	1	2	0	10	10
金葉	0	1	0	0	3	0	6	6
詞花	0	0	0	0	1	0	1	1
千載	3	1	2	0	1	0	8	8
新古	3	1	2	0	5	0	12	12

注1.「夕」の中には「夕暮」「たそがれ」等の表現によるものをも含み、以下「宵」の中には「今宵」等の表現によるもの、「夜ふけて」の中には「夜半」という表現によるもの、「明方」の中には、「東雲」「暁」「曙」「在明」等の表現によるものを含む。

2.「夜」は必ずしも夕方から明方までの夜の中の或る時点を問題とせず、ひろく「夜」を指して用いられているものをいう。

右において、広く「夜」が鳴く時刻として問題とされるのは当然のことであるが、夜のうち最も早い時刻に属

する「夕」は、千載・新古今集に至ってはじめて問題とされ、しかも作者は、千載集（千載初出歌人（以下略号使用）157 158 163）、新古今集（千220、新古208 216）、ともに当代歌人の歌であることを思い、それより稍々遅れた時刻の「宵」を問題とした歌が、後拾遺（後拾201）・金葉（後拾115）・千載（千167）・新古今（新古215）にそれぞれ一首ずつ見られ、これまた当代歌人の歌であることを思う時、三代集の時代には「夕」「宵」の時鳥は対象とされることなく、後拾遺集以後次第に関心が持たれるに至ったことをあとづけることができるのである。これに対応するかの如く、「今朝」という表現が三代集のみに見られるのも注目される。そして「夜ふかく」が金葉集以後は見られず、「明方」にとってかわられた感があるのである。また各集について見る時は、古今集が「夜深く」から「今朝」に至る間が問題とされるのに対し、後撰・拾遺集が更に遡って「夜ふけて」以後を、後拾遺・金葉集が更に遡って「宵」以後を、千載・新古今集に至っては「夕」にまで遡って、各折々を問題とし、時代の下降と共に、「夜」の全領域にわたり折々の時鳥の鳴く音に関心が持たれるに至っていると見られる。そしてその間にあって詞花集が僅かに二首のみ時刻を問題としていることは、時鳥の歌以外にも他にいろいろ見られる詞花集の特性と相俟って、詞花集の特異性を主張するものとなっているといえよう。

2 時鳥と他の素材

イ 橘

時鳥と橘の関係については、鶯と梅との関係の如く密接な関係にあるものとして万葉集以来詠まれ、古今集においても、

141 今朝来なきいまだ旅なる時鳥花橘に宿はからなむ

156 宿りせし花橘もかれなくになど時鳥声たえぬらむ

の如く載せられ、和漢朗詠集においても、

時鳥花橘の香をとめてなくは昔の人や恋しきの詠で有名であり、枕草子にも、「ほととぎすは、なほさらにいふべきかたなし。いつしかしたり顔にも聞えたるに、卯の花・花橘などにやどりをなして、はたかくれたるも、ねたげなる心ばへなり」（大系本四一段）と記されて有名である。しかしこの両者の関係も時代の下降と共に分離し、橘がやがて独立してゆき、結局前に述べた

時鳥歌群の歌の夏部総歌数に対する比率の下降の原因ともなっているのである。今、

A 時鳥歌群中時鳥と共に詠まれている橘

B それには関係なく独立して詠まれている橘

とについて見ると、次の如くである。

勅撰集名	A	B
古今	2（141 155）	1（139）
後撰	1（186）	1（188）
拾遺	1（112）	0
後拾	1（202）	2（214 215）（橘歌群）
金葉	0	2（157 158）（同右）
詞花	0	2（67 68）（同右）
千載	0	6（171～176）（同右）
新古	1（202）	9（238～247）（同右）

注1.（ ）内は当該歌の番号を示す。

2.新古今Bにおいて、244は橘歌群中の歌であるが、「時鳥」「花橘」両者が詠みこまれてある。

右において、たとえば古今集において、Aの時鳥と橘とがよまれている歌としては、前述の、

141 今朝来なきいまだ旅なる時鳥花橘に宿はからなむ

155 宿りせし花橘もかれなくになど時鳥声たえぬらむ

があり、何れも時鳥歌群中において、時鳥の宿としての橘として詠まれているのである。そしてBの「時鳥」の語を詠み入れることなく、独立して「橘」のみの詠まれた歌としては、

139 さつきまつ花橘のかをかげば昔の人の袖の香ぞする

が見られるのであるが、この歌が157～164の時鳥歌群中に配置されていることは、古今集における歌の配列を問題とする限り、やはり時鳥と無関係とは考えられないであろう。勿論その前後の歌が、137（さつきまつ）138（さつきこば）140（いつのまにさつきぬらむ）の如く、一連の「さつき」をよみこんだ歌であることを考えると、その類似の故に時鳥とは関係なくこの位置に配置されたとも考えられるが、なお時鳥歌群中に配置され、しかも他の141 155の場合「時鳥」「花橘」が共に一首中に詠みこまれていることを思う時、159の歌も完全に時鳥から独立しての橘とのみは解することはできないといえよう。これと同様なことは後撰集の場合にも見られるのであるが、後拾遺集以後においては、橘は時鳥歌群から独立して、

完全な橘歌群を形成するに至り、古今集159の歌の性格の延長上のものとして、懐旧の念との関連において詠まれるものとなっているのである。そして金葉・詞花・千載集においては、時鳥歌群中に橘がよみこまれることはもはやなく、時鳥の宿としての橘という性格の後退が顕著に見られるのである。そして新古今集の場合、

A 202 雨そそぐ花橘に風過ぎて山時鳥雲に鳴くなり

は、両者の直接の関係を詠んだものではなく、

244 時鳥花橘の香をとめて鳴くは昔の人や恋しき

は、橘歌群中の歌で、歌の配置された位置からは橘が主となる性格の歌であり、また和漢朗詠集にも「橘花　読人不知」として載せられている歌で、橘の歌としてうけとられ、また作歌年次からも古い歌ではあり、新古今集時代、やはり橘は時鳥の宿としてはもはや詠まれなくなっていたと考えてよかろう。このように後拾遺集以後における橘歌群の独立は、時鳥の宿としての橘から、懐旧の資としての橘へとその方向を転じ、時鳥からの分離ということにおいて注目されるものとなっている。

ロ五月雨（五月闇）・月

五月雨と時鳥は、枕草子に「ほととぎすは……五月雨のみじかき夜に寝覚をして、いかで人よりさきにきかむとまたれて、夜ふかくうちいでたるこゑの、らうらうじう愛敬づきたる、いみじう心あくがれ、せんかたなし。六月になりぬれば、音もせずなりぬる。すべていふもおろかなり」（大系本四一段）と記されている如く、五月雨の短夜、五月闇の折と時鳥との関係は、歌の場合においても好んで対象とされたものであった――後述の如くうけとられ方には差が見られるにせよ――。そして

また五月雨の降る折でなくとも後撰集163「五月雨近み」の如く、五月雨との関係において詠まれ、更に五月雨にまつわる五月闇も対象となり、一方また長雨にながめ暇なき頃、稀に出る月になく時鳥も珍重されたものであった。今、五月雨（五月闇）・月に関係して詠まれた歌の各集に見られる状態を見ると次の如くである。

（勅撰集名）（歌数並内訳〔五月雨〕）（歌数並内訳〔月〕）

古今　2（古153 160）　0

後撰　3（不知163 185）　2（不知148 157）

（後166）

拾遺　4（不知117 118）　0

（古116）

（拾124 五月闇）

後拾　0　0

金葉　1（後拾135）　1（金132）

詞花　0　0

千載　3（後拾189）　3（千161 163 188）

（千167 村雨）

（金193 五月闇）

新古　8（千201 202 214 215 220 235）　5（千209 210 212 237）

（新古236 237）　（新古211）

五月雨関係の歌においては、後拾遺・詞花集に一首も所載なく、月関係の歌においては、古今・拾遺・後拾遺・詞花集に一首も所載なく、後拾遺・詞花両集が両者共に載せていないことは、他の諸点とも相俟って注目すべきことといえよう。そしてまた千載・新古今両集が、五月雨・月の歌両者を通じて、それぞれ当代歌人群の歌によって構成されていることは、時鳥の歌に対する当代の時代思潮についても如実にこれを知ることができ、まことに興味深いものがある。

五月雨関係の歌についてみる時、たとえば、

古今160　五月雨の空もとゞろに時鳥何をうしとか夜ただなくらむ

後撰163　此頃は五月雨近み時鳥思ひ乱れてなかぬ日ぞなき

拾遺117　なけやなけ高間の山の時鳥この五月雨に声な惜しみそ

金葉135　時鳥雲路にまどふ声すなりをやみだにせよ五月雨の空

千載167　心をぞつくしはてつる時鳥ほのめく宵の村雨の空

新古215　声はして雲路にむせぶ時鳥涙やそそぐ宵の村雨

等、四月更衣と同時に待ち焦がれられた初音ゆえの時鳥も、五月雨と共に詠まれては、やはり雨ゆえに涙につながるもの、憂きもの思いにつながるものとして詠まれていることは、八代集を通じて変ることのない姿が見られるのである。この点、清少納言がとらえた前掲枕草子四一段の記事、「五月雨のみじかき夜に……、夜ふかくうちいでたるこゑの、らうらうじう愛敬づきたる、いみじう心あくがれ、せんかたなし」の記述とは対照的な把握の仕方が示されていることは興味深く、韻文の世界と

散文の世界にかかわる問題として、今後の課題としたいと考える

月に関係する歌としては、たとえば、

後撰 148 卯の花の咲ける垣根の月清みいねず聞けとや鳴く時鳥

金葉 152 時鳥雲の絶え間に入る月の影ほのかにもなきわたるかな

千載 161 時鳥なきつる方をながむればただ在明の月ぞ残れる

新古 209 在明のつれなく見えし月は出でぬ山時鳥待つ夜ながらに

211 時鳥なきているさの山の端は月ゆゑより恨めしきかな

等、五月雨晴れ間無き頃、稀々出た月の折鳴く時鳥として詠歌の対象となり、在明の月・雲間の月・出る月・入る月と、折々によせ詠まれているのである。そして千載・新古今両集に月に関しての歌が多くなり、しかも共に当代歌人の詠により占められていることは、嗅覚・視覚・聴覚とその訴える感覚に相異こそあれ、春部の梅の歌が八代集において、闇夜に香を愛でられた梅から、月夜の香と色とを愛でられた梅へと、好尚の変化が見られた如く、時鳥の歌においても、五月雨晴間無き頃の　五月雨の折の時鳥から、やがて月夜の時鳥の登場へと、月夜の美観にあこがれた新古今時代の風潮が示されていて、興味深いものがある。

以上八代集夏部における時鳥の歌について、問題となる一、二の点をとりあげて考察を試みたのであるが、そこに見られるものは、時代を通じての時鳥に対する共通の好尚と、一面時の流れと共にその移り行く姿の見られることとであった。更衣と同時に初音に焦がれる心、起き明かして聞く時鳥、寝覚めて聞く時鳥等、各時代に共通して詠まれながら、一面その中において、初音を待ち焦がれるにつけ、そこにあらわされる態度の変移、初音・一声・その他のなく音において、それぞれ示される好尚の変移、鳴く時刻に対する関心の変移、時鳥に関連しての景物に対する嗜好の変移等、和歌史のうつりゆきの一縮図として見ることができるのである。そしてまたこうした変移の中で注目されることは、後拾遺集が何かにつけて特異な性格を示し、和歌史の一屈折点となる性格を示していることであり、古来和歌史の流れが論ぜられる際、「後拾遺ぶり」として説かれた性格の一端がこ

こにも示されていることと、詞花集が六条藤家による撰集として、これまた特異な性格の一端を示していることとである。

時鳥の歌に関しては、なお他にも歌枕に関する問題とか、構成歌人に関する問題とか、いろいろ論ずべき問題も多いのであるが、それ等については今後を期したいと考える。

（学部四年生）

「中世散文文学研究会」について

第一回例会　昭和四十年七月四日
「正法眼蔵の一語法ートラについて」
田島毓堂氏

第二回例会　八月二十九日
太平記の人間形象について
北村栄子氏

第三回例会　九月十九日
太平記について　中西達治氏

第四回例会　十月十七日
中世における歴史と文学
桜井好朗氏

第五回例会　十一月十四日
お伽草子「北野本地」について
村上　学氏

第六回例会　十二月十二日
広本沙石集の新出古写本について
藤井　隆氏

第七回例会　昭和四十一年一月十六日
平家物語の語り　山下宏明氏

第八回例会　二月十三日
平家物語の人間像　服部幸造氏

第九回例会　三月二十日
発心集の編成　簗瀬一雄氏

第十回例会　四月二十四日
「我身にたどる姫君」第二部の構成
付、作者複数説　村上　学氏

第十一回例会　五月十五日
竜谷雲外旧蔵正法眼蔵の現形